


神田日勝記念館 だより

 神田日勝記念館 〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL(0156)66-1555



「馬」 1957年

Contents

- 2 神田日勝記念館から神田日勝記念「美術」館へ
同級生が語る「神田日勝の少年時代」続編
- 3 「家を描く」(前期常設展)
「小檜山博が語る神田日勝」(後期常設展)
- 4 「新世紀の顔・貌・KAO」三十人の自画像「二〇〇五」展
「美の浮標」〜多摩美術大学の洋画家たち〜
「追想「カトラン」」展
「四季折々に」村上俊彦油彩画展
- 5 平成十七年度特別企画展
「徳丸滋の世界」
- 6 第十一回無懇祭
第十三回馬耕忌
神田日勝記念館友の会に北海道博物館協会表彰
- 7 「美へのいざない」展
関連事業 作品解説・美術講座
坂田明三・青森・北海道ツアー「二〇〇五
第三回日勝祭
- 8 第十一回馬の絵作品展
第十一回馬の絵作品展表彰式
関連事業 馬の絵写生会
馬の絵作品十回展記録誌発刊
- 9 アート・キッズ・クラブ
ファミリー美術館事業 親子ワークショップ
- 10 冬休み子どもワークショップ
春休み子どもワークショップ
感想ノートより「20
- 11 町内小中学校の神田日勝についての
授業の取り組みから
- 12 芸術鑑賞バスツアー
子ども芸術鑑賞ツアー
水彩画教室
絵はがき新発売

2006.3.31

23



神田日勝記念館から
神田日勝記念美術館へ

神田日勝記念館は、平成十八年四月一日より館名が神田日勝記念美術館になります。

来館者から「神田日勝は何をした人ですか?」「地元の名士ですか?」などの問い合わせがあり、館としての性格を明確にする意味からの名称変更です。

また、休館日も通年で月曜日(祝日の場合開館)、祝日の翌日(ただし土日の場合開館)となります。

なお、館名プレートは吉田弘志町長の筆になるものです。



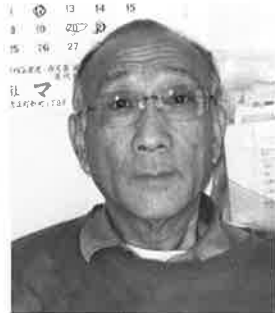
谷幸男氏

谷幸男氏は、神田日勝と鹿追中学校で中学二年生のときの同級であり、帽子を粹に被り、周囲を笑わせていた姿が印象深いと語ってくれました。



昭和35年3月8日連合青年団役員会 後列右端が日勝

同級生が語る
神田日勝の少年時代(続編)



橋本武司氏

なお、谷氏は理科部に所属しており、卒業の際に写真アルバムを作成して皆に配ったそうです。アルバムには、クラスの面白いや教員の名前なども記録されており、貴重な資料となりました。



宮部誠氏

橋本武司氏は、笹川小学校、鹿追中学校と同級、宮部誠氏は鹿追中学校で同級。二人を同時に取材しました。

橋本氏は、昭和二十年に齒舞島から引き揚げて笹川に開拓農家として入植。そこで日勝と知り合い、遊び仲間として親しくしたそうです。蜂の子を食べたり、川で釣りをしたり、近くの山にスキーに行ったり、馬そりや滑ったり、裸馬に乗って遊んだりしましたが、一番の思い出は日勝ともう一人の友人と三人で自転車帯広まで往復したことだそうです。その後、橋本氏は瓜幕に転居し、二十歳で釧路に移住したため、日勝とは疎遠になったそうです。

宮部氏は、鹿追中学校の在学中に、笹川で日勝と他の友だちと一緒に遊んだことが印象深いそうです。

取材では、お互いに記憶を確認しながら思い出が語られ、また特に橋本氏が日勝と親しく話題が豊富な取材となりました。



「家」1962



「家」1962頃

日勝が描く「家」は人間の不在やうち捨てられたものの存在感が強く感じられます。

素描では、墨やコンテを用いて画面の構図や構成を模索している姿がうかがえます。

家をモチーフにした作品は、画面いっばいにこげ茶色の色調で板壁を描いたものから、人物と家を組み合わせた構成的なもの、さらに板きれなどが散乱する心象風景のようなものへと変化していますが、それぞれがみな廃屋のような雰囲気があります。

神田日勝は、一九六〇年から六二年にかけて、「家」をモチーフにした作品を制作しました。本展では油彩画作品に関連する素描作品を展示して、二階展示コーナーで紹介しました。



「家」1960



「家(デッサン)」1960頃

「家を描く」(前期常設展)

四月二十八日～十一月六日



「小檜山博が語る神田日勝」(後期常設展)

十二月十三日～四月二十三日

神田日勝と同年で似たような境遇に育った小檜山博館長が、日勝作品九点に対する思いを語った言葉をパネルにして展示しました。

絵は心で感じるもの

ぼくは芸術というのは、わかるものではなく感じるものではないかと考えている。小説は読んで感じるもの、音楽は聴いて感じるもの、絵は見て感じるものだろう。

そして神田日勝の絵もまた、見る人それぞれがもつ感性と心がとらえて感じるものだと思う。一枚の絵には十万人が見れば十万人種類の見方と感じ方があり、また人は生きてきた自分の人生の殻(から)からはみ出した絵の見方をするにはできないのではないかと、という気がする。

今回、ぼくが神田日勝の絵を見て感じた、いかにも個人的な感慨を言葉にしてみようと思いたった。拙劣(せつれつ)さをお許しいただきたい。

神田日勝記念館長 小檜山博



館長の直筆原稿



「雪の農場」1970



「静物」1966

この他に、「馬」「家」「飯場の風景」「離農」「馬(絶筆)」「開拓の馬」「自画像」に館長の言葉が添えられ、直筆原稿も展示されました。

日勝の絵にひそむ哀しみの影の向こうには、じつは人生にたいする激しい希望がひそんでいるのを感じる。ことがある。この絵がそうだ。なぜなら、冬は春への序章だからだ。いい絵は、見る者の人生を炙(あぶ)り出してくる。この絵には、この北の大地に生まれ育ち、ここに生き、やがてこの土に還(かえ)ってゆくぼくの体と精神をつくっている風土を表面してゆく。

この絵から、人間がもつ底深い執念の恐ろしさが浮き出てくる。そして人間が生きたとはいかに無残なことか、という光景が露呈(ろせい)されている。ぼくはこの絵を見ていると、自分の胃と腸の内側を暴(あば)かされているような、ひどく恥ずかしい気分(おちい)に陥(おちい)ちいつて呻(うめ)いてしまう。ここに日勝の無意識がとらえた人間の正体がある。

「新世紀の顔・貌・KAO
—三十人の自画像—二〇〇五」展

四月二十六日～五月九日
神田日勝記念館特別展示室



伊藤馨一(小さな私)



森吉健
(自分)



ヒラキムツミ
(EARLY IN SUMMER)



田澤茂
(私と地蔵たち)



田島征三(だまれ!征三!!)

自画像といっても、写実的なものから抽象的なもの、心象表現のようなものなどさまざま。三十人による個性の競演のような展覧会でした。過去五回にわたり続けられた企画は今回で最終展となります。

美術評論家・中野中氏の企画による著名作家の自画像による全国巡回展。

六号サイズの平面作品では、油彩・アクリル・日本画・ミクストメディアなど多彩な表現技法のもの、立体作品では、ブロンズや乾漆などです。

「美の浮標」

多摩美術大学の洋画家たち

四月二十四日～五月八日 鹿追町民ホール



今井信吾(トガのショウケース)1995



大津英敏(TOLEDO)1999



高橋幸彦(隔)2004

展覧会をご覧下さる一人ひとりの心の「美の浮標」となることを、迷路に迷ってしまったかの美術界の閉塞感を打破する契機としての「美の浮標」となることを、欲張って希っている。(中野 中)

美術評論家・中野中氏の企画協力による展覧会。「美の浮標」とは、「安全航海や水先案内人的なもの」としての意味と三好十郎の戯曲『浮標』を念頭に命名されました。

多摩美術大学の教授である相笠昌義、今井信吾、大津英敏、木嶋正吾、高橋幸彦、鶴見雅夫の六人の洋画家二十一点の作品が一堂にしました。

中でも今井大津の両氏は、独立展に出品しており、同展に出品していた神田日勝とも近い世代です。

二十一世紀の初頭のいま、地球規模でこの汚濁、混沌の世に、北の地で開かれるこの

追想

カトラン展

八月六日～八月十六日 鹿追町民ホール



〈ピンクのテーブルクロスとアジサイとマリーゴールド〉

二〇〇四年に八十四歳で亡くなるたフランスの画家、パトナール・カトランの遺作展。



森工房にて(カトラン夫妻と)

四季折々に—村上俊彦油彩画展—

六月十六日～六月二十二日 鹿追町民ホール

清水町在住で荒土会々員の村上俊彦氏による油彩画展。「四季折々に」をテーマに山を描いた作品が燕壑祭に併せ展示されました。

村上氏は、神田日勝記念館の絵画教室の講師として指導に当たられております。

十勝の山々やシラカバ林などを季節感豊かに描き、来場者の眼を引いていました。



〈バケレバツ岳〉



村上俊彦氏

特別企画展
「徳丸滋の世界」
 十一月八日〜十二月十一日 神田日勝記念館

帯広出身の画家、徳丸滋氏の作品展「徳丸滋の世界」が特別企画展として開催されました。神田日勝の画友であった氏が所蔵する日勝からの書簡や年賀状も展示し、二人の心の交流や日勝の芸術観の一端にふれるとともに、徳丸氏の作品世界を俯瞰（ふかん）できる展覧会です。

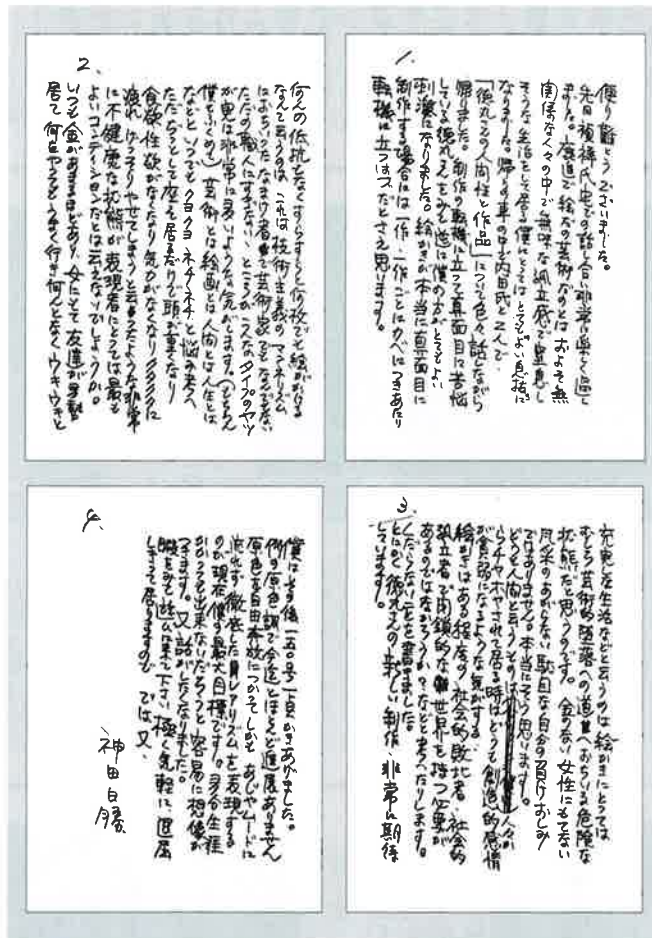


日勝と徳丸氏がお互いの作品を交換したもの



展示風景

帯広の弘文堂画廊で、一九六三年に相次いで個展を開き、徳丸氏が帯広を離れる際に神田日勝と絵を交換したものの、右上が日勝の（秋日）。



日勝が徳丸氏に宛てた書簡 昭和43/44年頃



日勝が徳丸氏に宛てた年賀状

徳丸氏と日勝は、一九六六年に札幌で開催中の全道展会場で初めて出会ったそうです。当時、日勝は全道展で会員に推挙され、独立展でも活躍、年上の徳丸氏にとっては絵の先輩でした。

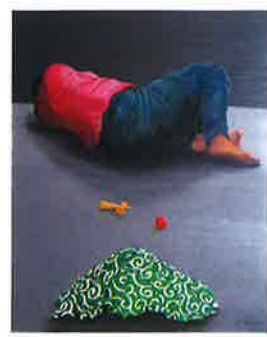
お互いの家を訪ねて絵画論を語ったり、徳丸氏が帯広を離れても、交流は続いていたそうです。徳丸氏が所蔵する日勝からの書簡を本展に併せて公開。

【徳丸滋略歴】
 徳丸滋氏は、一九三四年帯広生まれ。一九六七年に全道展奨励賞。七七年、全道展会員。その後、北海道現代美術展、北海道今日の美術展などに出品。倶知安町にアトリエを構えています。

本展は、一九六三年から二〇〇五年までの四十五点の出品。日勝から贈られた「秋日」、日勝の影響が指摘される〈ある男〉、〈ある女〉なども出品されています。



〈ダケカンバ〉2002



〈ある男〉1973



〈ある女〉1973

第十一回蕪壑祭

六月十七日
神田日勝記念館・鹿追町民ホール



開館を記念する蕪壑祭も今年で十一回目。

帯広の女声合唱団ハローコーラス総勢三十一名を迎え、一部では「しゃぼん玉」「川の流れるように」など、二部では指揮者の平野なぎさ氏の独唱、三部ではメドレーなどを披露、美しい歌声が展示室に響きました。

会場を町民ホールに移して、恒例となったワインとチーズの交流会。

山岸明実行委員長、吉田弘志町長、小檜山博館長らがあいさつ。

同ホールで油彩画展を開催中の村上俊彦氏も参加して、町民や演奏者らが歓談し、なごやかなひとときを過ごしました。



第十二回馬耕忌

八月二十八日 鹿追町民ホール

十三回目となる今年も、十勝管内の幕別町出身の上田文雄札幌市長を迎え、「地域と文化を語る」と題する講演、小檜山館長、菅学芸係長との鼎談(ていだん)、そして田中光俊氏によるギター演奏が行われました。

上田氏の講演では、子どもの頃の貧しかった時代をふり返りながら、物が豊かな現代では心の豊かさを追求することがまちづくりの基本であること、十勝は独立心が強く、神田日勝記念館は地元の人々の誇りであることなどを語りました。

三人の鼎談では、小檜山館長が神田日勝の絵が生活と密接につながっており、作品には生きること何かが込められているなどと話しました。

また、田中氏によるギター演奏も行われ、美しい調べに来場者は聴き入っていました。

その後、交流会が行われ、和やかな雰囲気です。



菅学芸係長、上田札幌市長、小檜山館長(左から)



ギターを演奏する田中光俊氏

神田日勝記念館友の会が 北海道博物館協会表彰

六月三十日 小樽市グランドホテル



表彰状を手にする山岸明友の会会長

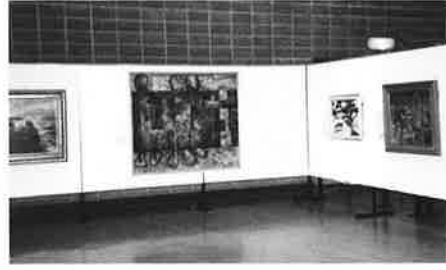
博物館の振興に功績のあった個人と団体に贈られる平成十七年度の北海道博物館協会表彰に、神田日勝記念館友の会が選ばれました。六月三十日に小樽市の北海道博物館大会の席上で表彰式が行われ、当館友の会顧問の脇坂裕氏が出席しました。

神田日勝記念館友の会が設立されたのは、一九九二年で、記念館が開館の前年です。記念館の建設運動に携わった方々がメンバーの中心で、現在の会員数は約百六十名にのぼります。

友の会の主な活動は、記念館に隣接する町民ホールでの年数回の企画展、神田日勝の命日に近い日曜日に画業を顕彰する「馬耕忌」、開館記念日には美術館コンサートと交流会を行い会員相互の親睦をはかる「蕪壑祭」、さらに道内の美術館を訪れる芸術鑑賞ツアーなど、多彩な活動を行って、美術館を支える心強い存在です。



石尾乃里子学芸員



北海道立近代美術館・帯広美術館「レクシオン
「美へのいざない」展

九月十六日～九月二十日 鹿追町民ホール

道立近代美術館と道立帯広美術館の収蔵品の中から三十九点を厳選し、展示する移動美術館「美へのいざない」が中標津、紋別に先がけて開催されました。

近代美術館からは、エコール・ド・パリの作家パスキーンやスーチンの油彩、アール・ヌーヴオーや現代のガラス作品、片岡珠子や国松登、佐藤忠良など北海道ゆかりの作家や、神田日勝の「板足・頭」。

また、帯広美術館からは、フランク・ステラや森村泰昌などのプリントアートが展示され、一流のコレクションの数々に来場者は魅入っていました。

関連事業として、初日に今井里江子学芸員による作品解説、最終日に石尾乃里子学芸員による美術講座が行われ、作品への理解を深めていました。



坂田明三
青森・北海道ツアー二〇〇五

十月八日 鹿追町民ホール

アルトサクソフ奏者の坂田明三率いる坂田明三（みい）のジャズライブが、神田日勝記念館友の会と鹿追町文化連盟の共催により、行われました。

坂田明三氏はピアノの山下洋輔氏ら、日本を代表する数々のジャズミュージシャンと共演し、国内外でも活発な演奏活動を展開しています。

今回は、坂田氏のほか、ベースがバカボン鈴木氏、ピアノが黒田京子氏。曲目は、ニューアルバムの「赤とんぼ」の中から「赤とんぼ」、「役立たず」などを披露。坂田氏の軽妙なトークと本格的なジャズのライブ演奏に、超満員となった会場の聴衆は引き込まれていました。



神田日勝記念館ロビーでの交流会

第三回日勝祭

十二月八日
神田日勝記念館展示室・ロビー



朗読する都甲雅子氏

神田日勝の誕生日を祝う第三回日勝祭が開催されました。

都甲雅子氏の「きつねのかくれ頭巾」などの遠野地方の民話の語りと、納村克子氏の新得神社のサクラにまつわる実話「悲願桜」の朗読が行われ、最後に、都甲氏が宮沢賢治の童話「虞十公園林」の朗読で締めくくりました。

朗読と語りの後、記念館のロビーで交流会が開かれ、参加者は誕生日を祝つく、なごやかに談笑していました。

第十一回馬の絵作品展

十月八日～十月十七日 鹿追町民ホール

作品講評

審査委員長 齊藤 隆博

今年是全国各地から寄せられた馬の絵作品は過去最高一八二点を記録しました。関係者一同大変喜んでいきます。応募作品も今までにない個性的な作品が集まりました。特に、その地域独特の行事を馬に関連付けて表現したものや、馬の親子の情愛を細やかに表現した作品。また大胆な構図を自分のものにしたもの、伸び伸びと明るい色彩で表現した作品など意欲的な作品が目につきました。

その中で、文部科学大臣賞の小谷地桃子(秋田東中二年)さんの作品は馬と祭りのイメージを力強く表現し、主題を鮮明にした優秀作です。



鹿追町長賞



北海道知事賞



文部科学大臣賞

第11回馬の絵作品展審査結果

- 文部科学大臣賞 秋田市立秋田東中学校2年 小谷地 桃子
- 北海道知事賞 羽幌町立羽幌中学校3年 工藤 美里
- 北海道教育委員会教育長賞 旭川市立日章小学校5年 佐藤 智香
- 鹿追町長賞 鹿追町立立上幌内小学校6年 若原 千紘
- 鹿追町教育委員会教育長賞 足寄町立大善地小学校3年 小松 佑哉
- 神田日勝記念館長賞 帯広市立帯広第一中学校2年 菅原 咲
- 北海道新聞社賞 羽幌町立羽幌中学校2年 石山 美咲
- 十勝造形サークル委員長賞 森町立鷹ノ木小学校2年 平井 晴佳
- 帯広市教育研究会図工美術部会長賞 本別町立勇足小学校1年 中山 隼
- JTB北海道社長賞 小樽市立桜町中学校1年 常規 菜月
- 北海道電力帯広支店長賞 初山別村立初山別中学校3年 村木 夢那
- 帯広信用金庫理事長賞 帯広市立啓北小学校2年 澤田 晋弥
- 神田日勝記念館友の会長賞 北海道教育大学附属釧路小学校4年 津田 日香留



町長賞の若原千紘さん

鹿追町民ホールで行われた表彰式には、北海道知事賞の工藤美里さんや町長賞の若原千紘さんら三十三名の入賞・入選者が出席し、賞状と記念品を受け取り、会場の自分の作品の前で記念写真を撮るなど喜びを味わっていました。

第十一回馬の絵作品展表彰式

十月十六日 鹿追町民ホール



過去最高の1,821点

またこの他にも素晴らしい作品が沢山あり、審査員一同審査に大変苦労しました。絵の表現は独創性があつて初めて輝きを増します。少し気になるのは、表現方法が似ている作者が同じに見える絵があることです。ぜひ自分独自の表現を工夫してください。次年度も全国各地から多くの作品が応募されることを心から願っています。

関連事業 馬の絵写生会

八月五日 ライディング・パーク



講師の脇坂裕氏



体験乗馬



参加者全員で記念撮影

馬の絵作品展の関連事業として実施している馬の絵写生会。今回は町内の小中学生二十七名が参加しました。講師の脇坂裕氏と眞鍋幸恵氏の指導のもと、子ども達は熱心に取り組み、また体験乗馬では一人ずつ馬にまががり、楽しそうに場内を二周しました。

会場の瓜幕のライディングパークでは、担当者が写生をしている子ども達のそばににんじんを撒くなどの配慮もあり、馬を間近に観察することができ、写生会に参加した多くが作品展に応募してくれました。

馬の絵作品十回展記録誌発刊



馬の絵作品展が平成十六年に十回展を迎えたのを機に記録誌を発刊しました。平成六年に始まった展覧会の歩みが絵で、応募数の増加やレベルの向上が見てとれます。



ガラスコップで風鈴作り(2回目)



アートキッズ★たんけんたい(展示室でクイズに挑戦)



バードテーブル作り(1回目)

アート・キッズ・クラブ

二〇〇五年五月二十八日〜二〇〇六年二月二十五日
鹿追町民ホール・神田日勝記念館

今年からの新しい試みとしてアートキッズ★たんけんたいと称して展示室の中でクイズに挑戦する取り組みも開始。

一回目は牛乳パックを利用したバードテーブル作り。二回目は不用となったコップや茶碗を活用した風鈴作り。三回目は牛乳パックを活用したびっくり箱作りとリサイクルおもちゃを中心とした内容で参加者は毎回二十名程度。

学校週五日制に伴う週末活用の児童対象事業として開始されたアートキッズクラブも三年目。五月から二月まで年八回、工作を中心に気軽に美術・工作に親しむ内容に、子ども達の活動もやや定着してきたようです。



日勝の「静物」でパズル作り(8回目)



日勝の絵からカルタを作る(6,7回目)



オリジナルキャンドル(5回目)



びっくり箱作り(3回目)

後半では、神田日勝の絵をもとにしたかるたや、作品「静物」をはさみで切ったパズルを製作するなど、日勝に関連する内容で、参加した子ども達は、皆熱心に取り組みました。

五回目の「オリジナルキャンドル作り」では、参加した母親から、作り方の説明を求められたりと、親子の関心も徐々に高まってきているようです。

参加児童は低学年が中心ですが、工作好きな児童が繰り返し参加し、兄弟や友だちを巻き込んでお互いに助け合ったり、手伝ったりする姿も見受けられました。

帯広の造形アドバイザーの成瀬登氏を講師に迎え、三歳から五歳までの幼児と親を対象に、親子ワークショップを実施しました。
ねこ、イヌ、クマ、ぶたの四種類の動物のお面を親と一緒に作ります。きれいな色のクラフト紙に型紙をあて、はさみで切り、凹凸ができるように折り、カラーシールで目玉を付けて完成。
参加した親子は四組九名。かわいらしい動物のお面のデザインに感心しながら、子どもと一緒に楽しそうに製作していました。
できあがったお面は、輪ゴムで調節して頭にかぶる事ができ、実際に試して喜んでいました。



ファミリー美術館事業 親子ワークショップ
「あらふしぎ動物のお面ができちゃった〜あ」
九月十七日 鹿追町民ホール

冬休み子どもワークショップ
楽しい壁かけを作ろう！

一月十二日 鹿追町陶芸工作館

陶芸工作館で、粘土を成形して壁掛け作りに挑戦しました。
指導は、陶芸工作館職員の三上正技師で、参加者は小学生八名。
まず、筒状の粘土を成形して、口の部分を斜めに切り、壁掛け用の穴を開けて、表面を湿らせたスポンジで整え、花や動物など、自分で工夫したデザインをへらで描きます。



素焼きと釉薬をかけて本焼きをしたあと、完成した作品が参加者に渡されました。
参加した子どもたちは、慎重に粘土の表面を整え、絵柄を工夫して描いていました。

感想ノートより ②

“未完の馬”は生きている。確かに無いはずの足が見えるのは日勝の技術だけだろうか。人が“未完の馬”の描かれてない部分に想像と希望をふくらますからこそ、見る人、一人一人が自分の“未完の馬”を完成させ、生きている馬、完成された馬として見えてくる、これは技法ではない。

“描くことは生活すること”と云った日勝、無いはずの足が見えてくる様に。私のなえた足で、いつ迄も、しっかり立って、歩み、かけだしていこう。

2005 4 19 T

高校卒業50周年で同期42名が入場しました。古希の人たちの仲間だが、神田日勝の作品の前で、ただ静かに時をすごし、だれもが感動して声もなく時をすごしました。

とてもすばらしい美術館でもあります。ありがとうございました。

6,7

大学の頃よりずっと来たかった神田日勝記念館にやっと来ることができました。作品の存在感、とても伝わってきます。どれだけ、作品を通して自分と向き合ってきたのか考えると本当にすごいです。私も彼のように絵を通し、自分と向き合っていきたいです。今日は本当に良い時がすごせました。また来ます。

6,8 中標津より S

3度目の来館となりますが、展示作品が来るたびに少しずつ入れ替えられていて、新しい作品に出会えるのがうれしいです。酪農に関わる仕事をしているので、“馬”や“人と牛”など興味深い作品が多く愛着を感じます。数年に一度は訪れるつもりでおりますので、よろしく願います。

9,28 標茶町 N.M

春休み子どもワークショップ
簡単☆実用的 ブックエンド！

三月二十八日 鹿追町民ホール



協力して釘打ちの作業をする子どもたち

本格的なみるみの板で組み立てるブックエンド製作に小学生二十八人が挑戦しました。
指導したのは、鹿追町内の大工、名野孝次氏と菅原重雄氏の二人。神田日勝記念館友の会会員の狩野正雄氏の発案で実現した今回のワークショップは、大工さんと子どもたちの触れ合いの場となりました。
最初は恐る恐る金づちをふるっていた子どもたちも、大工さんや、友だちの助けを得ながら、だんだんこつを飲み込み、一生懸命取り組みました。
参加した子どもたちは「楽しかった」「またやってみよう」「今度は椅子や棚など作ってみたい」と話して、完成したブックエンドを大事そうに持ち帰りました。

町内小中学校の神田日勝についての授業の取り組みから

神田日勝について、町内の小中学校で故郷学習「しおかおい学」として取り組みが各学校で行われたので、その中からいくつかを紹介します。

笹川小学校

笹川小学校は、神田日勝の母校でもあり、昨年も総合学習「神田日勝が見た笹川」と称して学校ぐるみの取り組みが行われました。

今年も、日勝が生きた時代の生活と日勝の絵に対する理解を深めるため、グループに分かれてさまざまな活動が行われました。

記念館を見学した後、日勝の年表、日勝の絵からヒントを得たカルタ、日勝の代表的な絵の凶鑑、季節に合った日勝の絵を選び、パソコンによるカレンダー、そして「馬（絶筆）」のジグソーパズルを板を切つて製作するなど、意欲的な取り組みが行われました。

現在も、日勝の近隣に住む方々が昔の思い出を語るなど、子どもたちにとって日勝は、身近な存在に感じられるようです。



瓜幕小学校

瓜幕小学校では三・四年生が、「神田日勝の絵の世界」を、五・六年生が「神田日勝が生きた時代」をテーマに授業が行われました。

記念館の展示室では、担任の先生がワークシートを用意し、「神田日勝さんはどんな人かな?」「絵をえらんで想像してみよう」などの課題が与えられ、子どもたちは真剣に鑑賞していました。

鹿追中学校

鹿追中学校も、神田日勝の母校です。一年生は「鹿追を探る」総合学習の中で神田日勝の子どもの頃と作品について「神田日勝の好きな食べ物は何?」「子どもの頃どんな絵を描いていたか?」など生徒が質問を用意して、取材する学習が行われました。

また、二年生は美術の授業の中で、日勝の絵画様式の変遷についてワークシートを使ったグループ学習が行われ、まず、二つの作品の比較、次いで四つの分類分けをして、題材、造形要素、作者の制作意図など、一歩踏み込んだ鑑賞授業が行われました。

瓜幕中学校

瓜幕中学校では一年生が「神田日勝の人生と絵の関わり」二年生が「神田日勝の生き方」農民・画家として「三年生が「北海道と神田日勝」というテーマで総合学習の授業が行われました。



日勝の幼なじみの沢川巖氏、山岸明氏の講話、日勝の生い立ちと絵についてのスライド学習、そしてペニヤに油絵の具をペインティングナイフで描く学習、さらに日勝と北海道の他の画家たちの活動を年表にして比較するなど、積極的に多岐に渡る授業が展開されたようです。

これらの取り組みは、各学校の先生たちと記念館との協力、また出張授業や見学、鑑賞授業などを通して行われ、鹿追町内の児童生徒たちは神田日勝についての理解をより立体的、多面的にとらえる機会になりました。



芸術鑑賞バスツアー

十一月十三日
 釧路芸術館・釧路市立美術館・釧路市北緯四十三度 美術館



釧路方面の三館を巡る芸術鑑賞バスツアーには、十六名が参加。釧路芸術館では『ぐるっと漫遊北海道』展を鑑賞。

釧路市立美術館では『米坂ヒデノリ』展を、北緯四十三度 美術館では北緯四十三度に位置する国内外の芸術作品を鑑賞し、参加者は名品の数々に芸術の秋を満喫していました。

子ども芸術鑑賞ツアー

一月二十九日 北海道立帯広美術館



道立帯広美術館で開催された『迷宮美術館 ミステリーツアー』と『BLUE/RED』を鑑賞しました。参加者は親一名と小学生九名。

「幻視のなかの迷宮」「光の庭としての迷宮」など六つのテーマに分かれたコーナーでさまざまな工夫された展示作品を、また、赤と青を基調とした作品をワークシートによるクイズを楽しみながら鑑賞しました。

水彩画教室

三月十二日・十九日 鹿追町民ホール



講師に中谷茂弘氏を迎え、水彩画教室が開催されました。参加者は親子や兄弟を含め、小学生から大人まで九名。

十二日には、野菜や果物を並べ、構図や色彩を工夫しながら描き、十九日には窓辺の風景や写真などを参考に風景画を描きました。

この企画は、町内の絵画サークルの活動の充実と、愛好者の拡充をねらいとして実施されたものです。

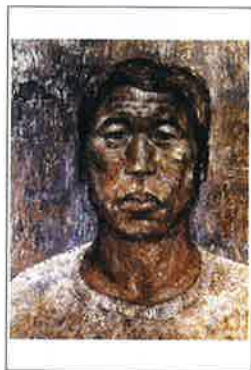
絵はがき新発売！
 四種類を新たに作成



「家」1962



「黄昏の農場」1969



「自画像」1964頃



「風景」1968

絵はがきは四種類が新たに加わり、全部で四十一種類になりました。記念館の受付で販売を予定しています。(一枚百円)